

日本画制作の現場Ⅲ－「創作」について、日本画の制作過程及び作家の言葉からの考察－

報告：藁谷 実、山浦 めぐみ

研究代表者：藁谷 実（平成 27-29 年度）

研究分担者：海老 洋（平成 27-28 年度）、今村 雅弘（平成 27-29 年度）、前田 力（平成 27-29 年度）、荒木 亨子（平成 29 年度）、山浦 めぐみ（平成 27-29 年度）、豊嶋 浩子（平成 27-28 年度）、古賀 くらら（平成 29 年度）



【図 1】 壁一面に展示された研究資料（平成 29 年度「日本画制作の現場Ⅲ－國司華子・室井佳世展一」／芸術資料館）

1. 研究概要

本研究は、現代作家が描く日本画作品とその制作過程で生み出される研究資料（スケッチ・エスキース・下図等）で構成する企画展覧会の開催、及びその作者自身の造形思想に発露する言葉で直接語られる講演会の開催を通じ、絵画における「創作」という営為を包括的かつ体系的に考察しようとする取り組みである。本学芸術学部日本画研究室が平成 14 年度から 19 年度にかけて行なった指定研究「日本画制作の現場 1～4（Ⅰ）、及びⅡ」の趣旨と研究方法を引き継ぎ、学内外に広く絵画芸術の啓蒙を試みる実践研究として再度開始した経緯から、同研究題目の第Ⅲ期に位置づけている¹。

研究方法については、Ⅰ・Ⅱ期がいずれも各年度一名の作家による個展形式の展覧会を企画したのに対し、Ⅲ期は各年度二名の作家を選定し、二人展形式の展覧会へと構成を改めた。これにより、作家ごとに全く異なる制作過程を対比して考察することが可能となり、「創作」における多様性の部分を際立たせた。

2. 研究背景・目的

「創作」とは何か－作家の研究資料と言葉から探る試み

絵画における「創作」とは、着想、取材にはじまり、制作イメージに基づく多くの実験と検証、自己批評といった作者の内的作業を経て、実際の作品が形作られるまでの営為全体を指す。作品制作に着手する以前のアプローチは、スケッチ、ドローイング、デッサ

ン、小さなメモ描きから計画的な下図の作成など様々で、それらが複合的に組み合わせられる場合も多い。そうしたものの一つ一つは、概ね作品制作と比べて短時間で終わるが、それゆえに作者の意図を直接的に反映し、着想を平面作品に定着させるための重要な手がかりとなる。本研究では、モデルケースとなる作家の完成作品と合わせて、そうした制作の導入段階で生み出される膨大な研究資料の提供を依頼、双方を同一空間で提示することにより、作者の試行の履歴を視覚化する試みを行った。また、通常作者の内側で静かに展開される「創作」の全容をより核心的に考察する目的から、作家自身が考える「創作」とはどのようなものかについて、事前に短い文章の執筆を依頼、これを展覧会のキャプションパネルとカタログに掲載すると共に、展覧会会期中に作家本人を本学へ招聘、作品の制作過程を自身の言葉で語る講演会を併催した。

学生の創意拡大、絵画表現の現在と多様性に触れる機会の提示

本学日本画専攻では、通常カリキュラムにおいて造形的基礎研究と技法研究をテーマにその習得を図り、同時に古典材料技法の専門講師を招聘して特別講義を行なうなど、様々な研究環境整備に当たっている。一方で、学生の創意をより多角的に開発し、深化を促すためには、質の高い同時代の美術状況に接する機会が重要となる。実際、近年の芸術におけるミクストメディアの普及とそれに伴う絵画表現の多様化は、1300 年余り殆ど変わらぬ材料技法を継承した日本画分野においても例外ではなく、こうした背景か

ら若い学生らが歴史的に著名な没作家の展覧会を鑑賞することと同時に、現存作家の先進的な仕事に触れることの意味は大きい。現代社会を生きる我々の生活環境に喚起される美意識や思想、それによって研ぎ澄まされる芸術家の感性と新たな表現の可能性は、後者の作品群にこそ潜んでいるからである。本研究の取り組みは、日本画を学ぶ学生にとっては各自応用研究の糸口として、また他分野ないし他学部の学生にとっては自国の伝統絵画が辿る今日の様相を知る導入として、いずれの研究分野においても不可欠な創造性の触発を期待するものである。

研究成果の地域還元と芸術資料館の活用

現代作家の仕事に触れる機会の重要性に付随する問題として、中堅世代で活躍する平面作家の発表の場が東京を中心とする大都市圏に集中していることが挙げられる。実際、広島県内ないし中国地方で彼らの大作を含む多様な作品群を体系的に鑑賞できる機会は未だ少ない。この背景には、そうした活動を紹介する企画ギャラリーが地方では少数に限られること、また主要な美術館の多くが地域社会に対する相対的役割と観客動員の観点から、歴史や社会に一定の評価を与えられた作家の展覧会を企画する傾向にあることなどが考えられるが、ここに改めて本学芸術資料館の存在意義が見いだされる。芸術資料館は学内の研究成果を蓄積し、それらを地域社会の共有資産として広く開示する目的のもとに運営されており、営利を前提としない点、教育研究機関として市民の先進的情操教育に努める役割を担う点において、先の現状を補完するかたちでの展覧会企画を提案できる数少ない施設といえる。本研究における展覧会及び講演会の開催は、この芸術資料館の機能を積極的に活用するものとして、準備段階から同館と連携を図り、全国美術系高校・大学機関への周知及び展覧会カタログの配布を始め、特に広島県内の美術系高校と大学、社会人カルチャー教室等については、これに加えて団体鑑賞の呼びかけを行なった。その結果、3カ年の展覧会開催を通じて広島県内を始め、中四国、九州、近畿地方から幅広い年齢層の動員を得ることができた。

3. 研究報告

平成 27 年度「日本画制作の現場Ⅲ－村岡貴美男・荒木亨子展－」

【展覧会】

会期：平成 27 年 12 月 8 日（火） - 20 日（日）

会場：広島市立大学芸術資料館 5 階展示室

展示作家：

村岡 貴美男（東京藝術大学非常勤講師・日本美術院同人）

荒木 亨子（東京藝術大学非常勤講師・創画会会員）

※各作家の役職は当時

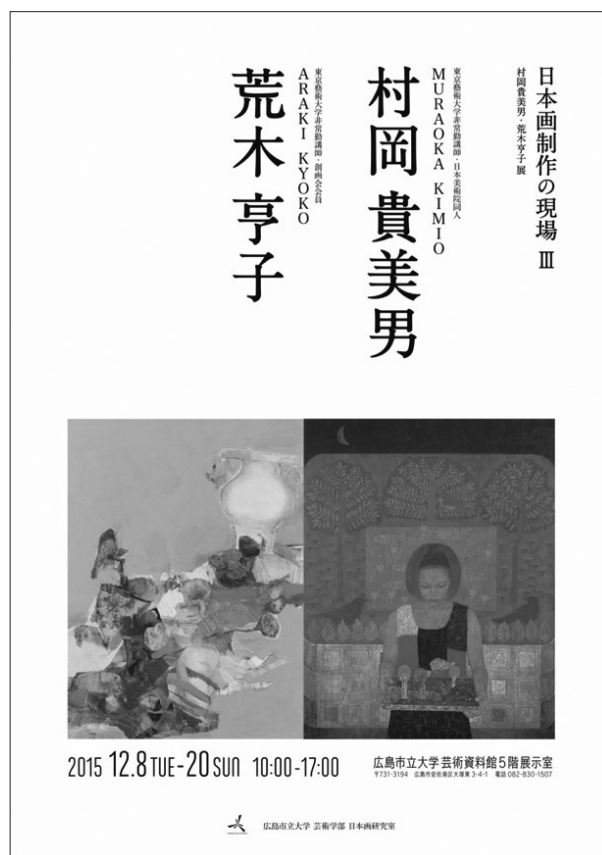
【講演会】

会期：平成 27 年 12 月 18 日（金）

会場：広島市立大学講堂小ホール

パネリスト：

村岡 貴美男、荒木 亨子、海老 洋、今村 雅弘、前田 力



【図 2】展覧会ポスター
（平成 27 年度「日本画制作の現場Ⅲ－村岡貴美男・荒木亨子展」）

平成 27 年度は、村岡貴美男氏、荒木亨子氏の二人展を開催、12 月 18 日には両氏を招聘した座談会形式の講演会を開催した。

展覧会当日までに作品と共に寄せられた研究資料は、両氏の制作への取り組みの違いを顕著に示す興味深いものであった。作品制作で重視するのは「構図・構成」と語る村岡氏の資料の殆どは、本人自身の覚書として描かれる膨大なエスキースだった。それらは画面構成のイメージをラフに描き留めた小さなメモから日本画の絵具で精緻に描かれたものまで幅広く、本画作品と見比べたとき、そこには一枚の作品を完成へと向かわせる作家の思考の道程が着実に映し出されていた。一方、荒木氏は、本画作品と必ずしも直結しない鳥や植物のスケッチ、人体クロッキー、また包装紙やマスキングテープなど様々な素材でコラージュされたラフな下絵等が中心であった。「絵具の物質感を頼りに、画面上でやりとりしながら描いている」という本画作品は、そうした日々のスケッチやイメージを複合



【図3】 座談会の様子（平成27年度『日本画制作の現場Ⅲ－村岡貴美男・荒木亨子展－』／講堂小ホール）

的な造形の手がかりとしながら、塗り重ねては剥ぎ取られる絵具の偶発性と共に作家の感覚を通して徐々にまとめられ、やがて完成へと至る。日本画を学ぶ学生や鑑賞経験の多い人々にとっては関心の高い作家同士の展覧会だったこともあり、会期中何度も足を運び、それぞれの作品と資料を熱心に鑑賞する姿が多く見られた。

座談会当日は、講壇壇上で招聘した作家らの作品と制作過程のスライドを交互に投影しながら、それぞれの作品解説と、普段の制作の進め方について何うところから始まった。途中、壇上上がった本学教員の制作過程や動機についても話が及び、普段あまり語られない作家個人としての考えを互いに垣間見る機会となった。また、通常の日画作品の他に樹脂や鉄などを用いた立体作品やインスタレーション作品も手がける村岡氏の作品を画像と映像で紹介、異素材と日本画素材の共存についての考えも伺った。その後、パネリスト全員が作家であると同時に大学で教鞭を執る立場から、美術を教えることの難しさについても語られた。「学生のときは言い切ってくれる先生の方が良かったが、今はそうでない方がいいのかなと思っている」（村岡）、「学生が持っているものをちょっと引っ張ったり、客観視したりできるようなお手伝いをしている」（荒木）と、いずれも学生自身の気づきや判断に委ねる指導を心がける点は、登壇者全体の共感を得ていた。会の終盤は来場者との質疑応答が交わされ、それぞれが団体展で発表を続けている理由や、自身の制作活動における「日本画」の捉え方などについて話された。

平成28年度「日本画制作の現場Ⅲ－宮島弘道・山本浩之展－」

【展覧会】

会期：平成28年10月28日（金） - 11月13日（日）

会場：広島市立大学芸術資料館5階展示室

展示作家：

宮島 弘道（女子美術大学教授・創画会会員）

山本 浩之（筑波大学准教授・日本美術院特待）

※各作家の役職は当時

【講演会】

会期：平成28年11月6日（日）

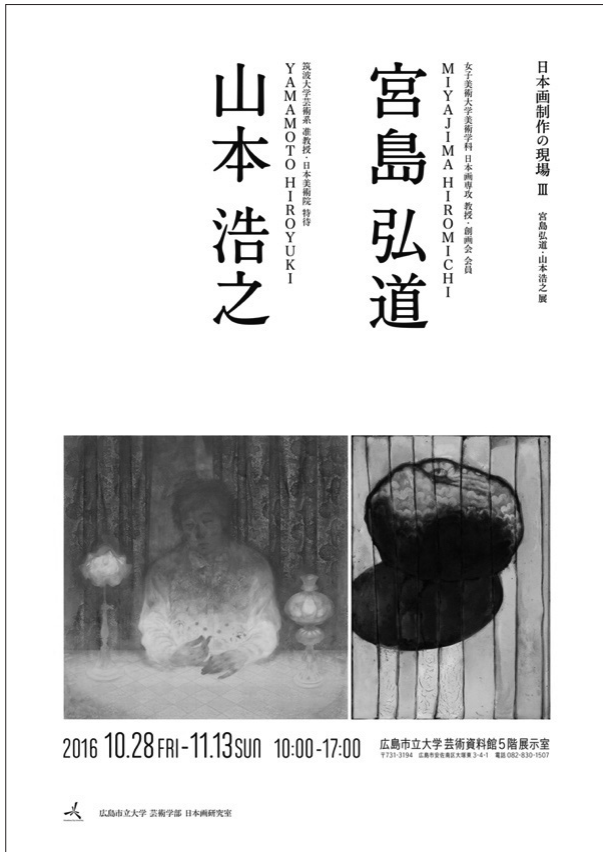
会場：広島市立大学講義棟6階603大講義室

パネリスト：

宮島 弘道、山本 浩之、今村 雅弘、前田 力、荒木 亨子

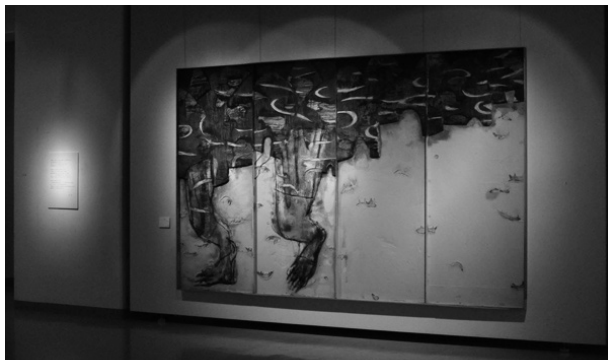
平成28年度は、宮島弘道氏、山本浩之氏の二人展を開催、11月6日には両氏を招聘した座談会形式の講演会を開催した。日本画の典型的な技法材料をベースに、丹念なデッサンやスケッチと段階的な下図の作成を経て仕上げられる山本氏の作品に対し、アクリルやビニール、粉パテといった日本画では珍しい素材を用い、屋外で制作されるという宮島氏の作品が一堂に会した展覧会は、これまでにない異色のコントラストを放つものだった。

「実家が寺なので、自ずと東洋思想に触れることが多かった」と語る宮島氏の作品には、仏教をテーマに扱ったものが度々見られ



【図4】 展覧会ポスター
 (平成28年度「日本画制作の現場Ⅲ－宮島弘道・山本浩之展－」)

る。本展会場で横幅3mを超える大型作品として特に目を引いた《下山図》は、古来仏画で度々描かれる出山図(出山釈迦図)に着想を得た作品で、その物語から受けた衝撃をもとに何枚ものエスキースを経て描かれているが、完成画に典型仏画の面影はなく、山を怒涛の如く駆け降りる二本の足と無数の抽象形態とが全く新しい迫力ある画面を作り出していた。自身が日頃心動かされるものの実感や衝動を起点に、スケッチやエスキースを通じて徐々に抽象



【図5】 展覧会風景 (平成28年度「日本画制作の現場Ⅲ－宮島弘道・山本浩之展－」／芸術資料館)

化・観念化されるモチーフの様相と、平面絵画の規格に囚われず強い物質感を押し出すその作品性は、来場者に日本画の概念を覆す強い印象を与えた。それとは対照的に、モチーフの心象をテーマに作品制作を続けているという山本氏の作品は、日本画の岩絵具が持つ美しい発色を活かす柔らかくで鮮やかな色彩が特徴だが、モチーフに描かれる人物や動植物は生々しい気配に満ち、こちらもやはり独自の世界観を放つものであった。

座談会では、こうした両氏の作品性を紐解く個々のエピソードが紹介され、また今回は特にそれぞれの制作過程と技法材料について、スライドを使った詳細な解説がなされた。会場から寄せられた質疑のうち、「日本画とは何か」との問いに対しては、「現代美術が盛んだった大学時代、教員からも『目指すは世界だ』と言われて日本画っぽくないアプローチをすることが王道だった。日本で描くから何をやっても日本画だと思っていたが、最近はケミカルな素材に違和感を感じて、そこから離れようとしている。日本画はスタイルではないので、その関わり方は自分の中で決めていくもの」(宮島)、「語りすぎない、説明しすぎないもの。能が表現として日本的で、日本画の根底に通じると考えている。あまり描いていないが、そこにある感じがする、気配や存在感を表そうとすることが日本画特有の表現かと思う。でも答えはまだ出ていない」(山本)との回答が出された。それぞれの作品はまさにその体現として鑑賞者に畳み掛ける。当該年度は本展及び座談会を大学祭の時期に重ねたことで、広島県内外より過去の倍近い来場者数を記録、より一般に開かれた研究展となった。

平成29年度「日本画制作の現場Ⅲ－國司華子・室井佳世展－」
 【展覧会】

会期：平成29年10月27日(金) - 11月12日(日)

会場：広島市立大学芸術資料館5階展示室

展示作家：

國司 華子 (多摩美術大学客員教授・日本美術院同人)

室井 佳世 (創画会准会員)

※各作家の役職は当時





【図6】 展覧会風景（平成29年度「日本画制作の現場Ⅲ－國司華子・室井佳世展－」／芸術資料館）

【講演会】

会期：平成29年11月10日（金）

会場：広島市立大学講堂小ホール

パネリスト：

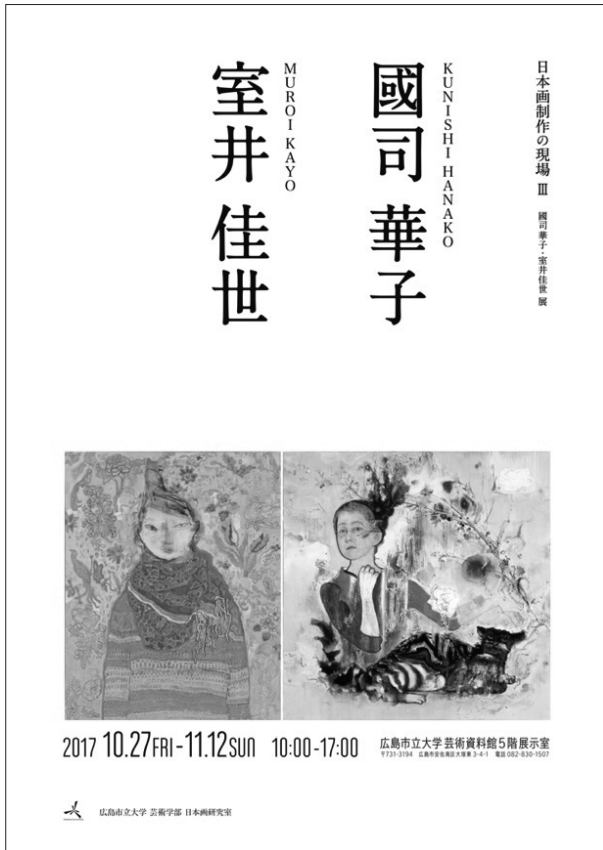
國司 華子、室井佳世、藁谷 実、今村 雅弘、前田 力、荒木 亨子

Ⅲ期研究の最終となる平成29年度は、國司華子氏、室井佳世氏の二人展を開催、11月10日には両氏を招聘して座談会形式の講演会を開催した。

作家自身が「私の作品は書に近い」と語る國司氏の作品は、人物や動植物など軸となるモチーフの一部を除き、画面の大半が下描き無く即興的に置かれる絵具の偶発的な滲みや色かたちによって描かれており、これまでのどのモデルケースとも異なるタブローへの取り組みを示していた。一方、「発想や作画のイメージはメモとして書き留めるが、本画が一番良くないといけなくて、下図はあまりガッチリ描かない」という室井氏の作品もまた、制作過程は画面上での試行錯誤が中心。もっとも、本展覧会のために寄せられた未だかつてない枚数のスケッチを見れば、植物への飽くなき関心と写生の積み重ね、そして日常に向けられる繊細な観察眼が、本画作品の深い叙情性と完成度を支えていることは明白だっ

た。即応的感性が創作の主体となる両氏の作品が並んだ本展は、各々の全く異なる色彩感覚と造形感覚ゆえに個性が際立ち、拮抗しながらも調和する相互の輝きが印象的であった。

作家を招聘して行われた座談会は、そうした作品性を映すように、冒頭から感覚的な表現が飛び交う作品解説で幕を開けた。独創的なタイトルが多い國司氏の作品について、「聞き間違いから名付けた《不思議》や、エレガントな言葉の響きに対して忘れないための予備の記録を意味する《備忘録》、おかしくてたまらず絵に描いた。近年は言葉と絵とが近づいてきていて、言葉を楽しんだり、言葉に助けられたり、言葉のために絵を描きたいと思うこともある」（國司）、また人物と植物を主題に扱うことが多い室井氏のモチーフの捉え方について、「人物を描く時に植物を描くような、植物を描いている時に人間を描いているような感覚がある。過剰な思い入れを消して、ただの色や図柄として両方を扱いたいのでそうにしていると思う」（室井）など、普段は作家本人しか知る由のない制作に向かう内面の動きが披露された。また、学生時代や若い時期に指導を仰いだ平山郁夫、加山又造、秋野不矩、堀越保二らとの関わりが自身の制作活動に影響を与えたことや、夫婦共に日本画家である両氏の日常の様子、作家として卒業後どのように生活を続けて来たのかに関する具体的なエピソードも紹介された。終



【図7】 展覧会ポスター
 (平成 29 年度「日本画制作の現場Ⅲ - 國司華子・室井佳世展 -」)

盤の学生に向けたメッセージでは、「絵を描き続けられるかどうかは、自分自身が続けると決めるかどうかということ」(國司)、「就職や家庭を持つことで絵が描けなくなると思わず、状況に迫られたらそれを受け入れて続けてみる。するとそれが思いがけず勉強になったり、違うモノの見方ができるようになったりする。絵を続けることに縛られすぎない方が面白い」(室井)と、各々の人生経験から実感のある意見が述べられた。女子学生が多い本学芸術学部において、女性作家二名に着目した当該年度の企画は、若い彼らが将来の作家像や生き方を具的にイメージする上でも示唆に富むものとなったに違いない。

註

1. これまでの関連研究実績及び報告は以下に掲載。
 倉島重友「日本画制作の現場『八木幾朗展』」『広島市立大学芸術学部紀要』第9号(2004年3月)、58-59ページ
 北田克己「片桐聖子シンポジウム『日本画の可能性』」『広島市立大学芸術学部紀要』第10号(2005年3月)、34-41ページ
 北田克己「日本画制作の現場」『広島市立大学芸術学部紀要』第11号(2006年3月)、34-35ページ
 北田克己「日本画制作の現場4」『広島市立大学芸術学部紀要』第12号(2007年3月)、8-11ページ
 北田克己「日本画制作の現場5」『広島市立大学芸術学部紀要』第13号(2008年3月)、6-7ページ
 北田克己「日本画制作の現場Ⅱ」『広島市立大学芸術学部紀要』第13号(2009年3月)、11-13ページ



【図8】 座談会の様子 (平成 29 年度「日本画制作の現場Ⅲ - 國司華子・室井佳世展 -」 / 講堂小ホール)